縄文のくらし見えた

群馬・矢瀬遺跡

　縄文時代の村がそっくりそのまま、現代によみがえった。巨大な木柱が並ぶ祭祀（さいし）場、ひと抱えもある河原石を敷きつめた祭壇、人工の池、竪穴（たてあな）式住居址（し）、石をだ円形に配した墓群……と、村を構成する要素がそろって出土した群馬県月夜野町の矢瀬（やぜ）遺跡。その立体的な姿は縄文時代のイメージを大きくふくらませるもので、〝弥生時代の吉野ヶ里〟に対する〝縄文時代の矢瀬〟ともいうべき全体像に、考古学関係者らは驚きの声を上げている。

　縄文時代の村は通常、生活の場と祭祀の場で構成されていたと考えられているが、これまでそっくり出てきた例は一つもない。それが今回発見されたのは、村の範囲がコンパクトにまとまっていたことと、現場が利根川の河岸段丘にあって、遺構が適度に湿った砂礫（されき）の層に包まれているという自然条件に恵まれていたためだ。

　この遺跡が貴重なのは、縄文時代の村の様子がひと目でわかる点。先ごろ国営公園化が閣議決定された佐賀県の吉野ヶ里遺跡が重要視されているのは、邪馬台国との関連というよりは弥生時代のムラを構成する要素をすべて兼ね備えていたためだった。その意味で、矢瀬遺跡は吉野ヶ里遺跡に匹敵する発見といえる。

　三宅敦気・月夜野町教委主事も「縄文の村の姿が目の前に浮かんでくる。こんな遺跡にぶつかり、うれしいというより怖いぐらいだ」と興奮を隠さない。

　遺構の中で特に注目されるのは、祭祀の施設と見られる方形巨木柱列。同様の遺構はこれまで北陸周辺で確認されていただけだったが、今回の発見で縄文文化に普遍的な施設である可能性が出てきた。

　また、この柱列の西に隣接して築かれている人工の池も全く前例がない。これまで縄文時代の水場の遺構はあまり例がなく、群馬県榛東村の茅野遺跡で確認されている水場状遺構も規模が一・八㍍×一・〇㍍と小さめで、使用している石が径十―十五㌢程度にとどまっていた。ところが、ここの池の規模は面積でそれの約八倍に当たり、構造的にも手が込んでいることから、前原豊・前橋市教委文化財保護課主任は「中世の庭園を思わせる立派なもので、人工池のルーツと言えるのではないか」と語る。

　池の周りには石皿が数個散らばっており、水場のほとりで、クルミなどの木の実を砕いて、すりつぶしていた縄文人の姿も彷彿（ほうふつ）させる。

　一方、「目」の字形をした炉の〝袖（そで）飾り〟が一部の住居址から見つかったが、各地で発見される縄文土器の表面に施されている装飾文様だった。具体

明だが、縄文

映した重要な

えられる。

　縄文人のな

活の跡と美意

て突然、現代

現した矢瀬遺

は開発によっ

命にあるが、

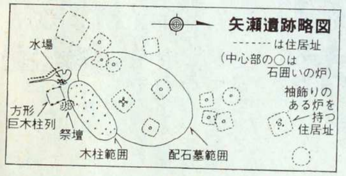
構が目白押し

その保存をめ

論議が巻き起

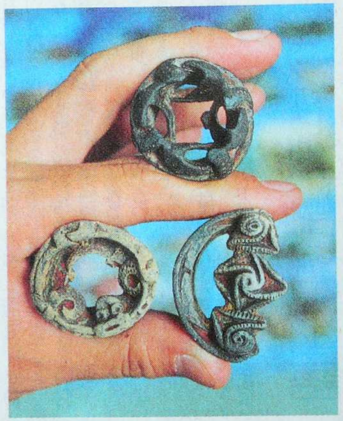
文

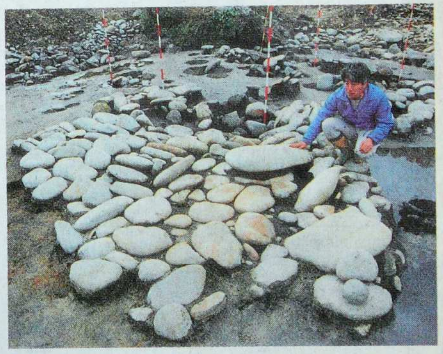
写真



「目」の字形の〝袖飾り〟を持つ炉が見つかった住居址。四つの穴は屋根を支えた柱穴

㊧縄文人のすぐれた美意識を物語るはめ込み式の土製耳飾り㊦祭祀場跡に残るナゾの祭壇。何のために用いられたのか、まったくわからない





㊤巨木文化を証明する祭祀場跡の方形柱列の柱根（直径約50㌢）㊨土器の表面に施された「目」の字